

ティーチング・ポートフォリオ

史学科 高津 純也

(記入日： 2022年 9月 28日)

1 教育の責任 (何をやっているか：担当科目)

アジア史研究入門(1) (1年前期必修)、アジア史概説(1) (2年後期必修)、アジア史演習(1) (3年選択必修)、東アジア史 (3~4年後期選択必修) など

2 理念 (なぜやっているか：教育目標)

日本を含む上位ブロックである東アジア世界の歴史文化社会について学び、また自ら調べ自ら考えること、その結果をまとめて発表や討論に臨むことなどによって、現在および未来をよりよく生きるための教養、および社会で活躍するためのスキルを身につけることを目標とする。

3 方法 (どのようにやっているか：実践の工夫)

「アジア史研究入門(1)」においては、課題提出の機会において、知識を問うような課題や正解を求めるような課題ではなく、学生自身が自らの興味関心に関連する書籍を選択し、その内容を要約させるような課題を与えた。これは、歴史事項についてその知識量を競うのではなく、その意義や背景・影響まで含めて理解し、また自ら考察するという歴史学の本質に馴染み、高校の歴史の授業スタイルから思考法を転換することを促すという目的に基づく。「アジア史演習(1)」においては、漢文資料を参加者で輪読し、かつ毎回読んだ範囲内にて言及された事項について次回までにレポートさせるという授業形態の中で、講読・レポートのいずれについてもグループワークを導入し、参加者相互で協力して進展させることを促した。

4 成果 (どうだったか：結果と評価)

「アジア史研究入門(1)」においては、受講者のほとんどが、自ら選択した書籍の内容についてその全体を要約できていることを確認できた (エビデンス 1)。

「アジア史演習(1)」においては、グループ内で協力して課題に当たることで、内容が濃く誤りの少ないレポートを作成していることを確認できた (エビデンス 2)。またそのレポートについても漢文資料読解についても、個人個人で作成するよりも完成度が高いものとなった、という感触を持っている。それはエビデ

ンスを伴うものではないが、本ゼミにおいて例年類似のカリキュラムを実施してきた経験、およびゼミ参加者の個々の実力を入学時から他の担当科目を通じて把握してきた経験に基づく。

5 今後の目標（これからどうするか）

「アジア史研究入門(1)」については、2020～21年度に実施したオンライン授業において、講義時間が減少した分を課題提出で補った結果、授業時間外の学習時間が増加したという経緯がある。しかし対面授業の再開により今年度は旧来の形態に戻した。それは過去2年、全体的に課題の負担が過重であるという意見が学生から多く出たためであるが、授業時間外の学習時間を適切な形で増加させるべきであるという全学的な課題に鑑み、レポート作成の負担を学期末から授業期間全体に分散させるなどの工夫を講じ、学生の負担が過重にならない形での学習時間増加を改めて図りたい。

6 エビデンスとなるもの（資料の種類などの名称）

1. 「アジア史研究入門(1)」学期末レポート（講評記入後、提出者に返却）
2. 「アジア史演習(1)」各回のレポート（発表・討論ののち教員保管）

ティーチング・ポートフォリオ

史学科

氏名 辻浩和

(記入日：2022年 9月 1日)

1 教育の責任 (何をやっているか：担当科目)

基礎ゼミナール (1年前期必修科目 2単位)、日本史研究入門 (1) (1年前期必修科目 2単位)、日本史研究入門 (2) (1年後期必修科目 2単位)、コミュニケーション能力基礎演習 (2年前期選択必修科目 2単位)、文献講読演習 (2年後期選択必修科目 2単位)、日本史概説 (1) (2年前期必修科目 2単位)、日本女性史 (2) (2~4年後期選択科目)、社会科教育法 I (2年前期教職科目 2単位)、社会科教育法 II (2年後期教職科目 2単位)、日本史演習 (2) (3年通年選択必修科目 4単位)、史資料演習 (4年通年選択必修科目 4単位)、教職実践演習 (4年教職科目 2単位) など

2 理念 (なぜやっているか：教育目標)

学生が、歴史的経緯や社会的背景に照らして問題点を発見し、様々な種類の文献資料を的確に読解・分析することでその解決に至る能力を身につけること。

3 方法 (どのようにやっているか：実践の工夫)

学生が文献から様々な「問い」を立てられるよう、段階的な工夫を行っている。日本史研究入門 (1) (2)・日本史概説 (1) ではコメントシートを毎回講評することによって発問の仕方を身につけさせる。文献講読演習・日本史演習 (2) では、テキストの輪読や研究報告の中で、多様な観点から質問が出るよう質問カードを事前に準備し、討論の素材として活用させるほか、報告者にトピックの作成を義務付ける。史資料演習では、個人面談の形で問題を掘り下げる方法を学んでもらっている。また、様々な発問を、どのように組み立てればよいかという構成法の指導として、基礎ゼミナールのレポート作成では個別指導を行っている。史資料演習では夏季に章立ての個別指導をオンラインで行っている。

4 成果 (どうだったか：結果と評価)

コメントシート、質問カードの利用は、回を重ねるごとに、それまでの学習成果を踏まえた、より多様な質問が出るようになった (エビデンス 1)。文献講読演習・日本史演習 (2)・史資料演習では、毎回の討論を通じて、他者の分析

視点や発表内容を取り入れたトピックが目立つようになった（エビデンス 2・3）。1 年次の基礎ゼミナールと比べて、4 年次の史資料演習では自分で論理的な章立てができるようになっており、順番の入れ替えなど細かい指導で済む傾向が見られる（エビデンス 4・5）

5 今後の目標（これからどうするか）

2・3 年次にも、レジュメ作成などにおける構成法の指導を増やしたい。演習での討論に誘導をかけるほか、レポート添削を強化する。

6 エビデンスとなるもの（資料の種類などの名称）

- 1 コメントシート・質問カード（非公開）
- 2 文献講読演習・日本史演習（2）・史資料演習ガイダンス資料（非公開）
- 3 学生作成のレジュメ（非公開）
- 4 2022 年度基礎ゼミナール第 1 次提出レポートとそのコメント（非公開）
- 5 2022 年度史資料演習章立て案とそのコメント（非公開）

ティーチング・ポートフォリオ

原田晶子

(記入日：2023年2月28日)

1. 教育の責任

西洋史研究入門(1)(2)、西洋史演習(1)、史資料演習、文献購読演習、コミュニケーション能力基礎演習、基礎ゼミナール、文献講読(2)、ヨーロッパ精神史、外国女性史、観光文化(ヨーロッパ)、ドイツ語で読む社会と文化

2. 理念

史学科の西洋史担当教員として、高校までの「暗記科目」とのイメージとは異なる「歴史学」を伝えるように努力しています。本学の史学科に進学する学生の多くは日本史に関心があり、西洋史への興味は必ずしも高くないため、まずは西洋史に関する基礎的な知識の習得を目指していますが、同時に「いつ、何が起こったか」だけではなく、「なぜ、その時にその事件が起こったのか」背景について考えるよう指導しています。そして学説の変化についてもできるだけ触れるようにし、今授業で伝えている内容も決して「絶対」的な教えではなくいずれ変わる可能性があるため、最終的には「自分の頭で考えること」が重要であると伝えています。史学科で学んだ歴史の知識は、学生が卒業後の人生で必ずしも役に立つものではありませんが、史学科の4年間で「考えること」を学ぶことこそが、人生においてもっとも応用の利く重要なことであると考えています。

3. 方法

講義科目では、事前に Teams に授業資料を上げ、各自の西洋史に関する知識量に応じた予習を促しています。その際、重要な部分については空欄で配信しており、授業時も集中するよう工夫しています。

また最近の学生は視覚情報に強く、具体的なイメージが湧くと理解したと考える傾向があるので、図像資料(図版や地図、年表、家系図)や映像資料を多用し、学生の授業理解度が深まるよう工夫しています。

さらに講義科目では、学生の理解度を確認するため、授業の最後に課題としてコメントシートの提出を求めています。Teams の Forms より提出させているため、ほとんどは各自にコメントを付けて返却していますが、重要と思う質問や複数人が疑問にもった事柄に関しては、次回の授業の冒頭で全員に対して回答するようにしています。このような方法で、講義科目であっても一方方向の授業にならないよう工夫しています。

演習科目では、最初にレジュメのひな型を示し、報告の際に問題提起-議論-結論をきちんと設定させ、論理的に思考する訓練となるよう心掛けています。

また演習科目では、全員の積極的な授業への参加を促すため、報告に対して出席者は必

ず質問することを義務づけています。そして質問に対してはまず報告者に応えさせることで、報告者の入念な準備を促しました。実際、授業の回数を追うごとにリサーチの精度が上がっているとの手応えがあります。

4. 成果

講義科目では、事前に授業資料の一部を配信することで予習する学生が増え、学生の授業理解の深化につながったと考えます。また、視聴覚資料を多用したことにより、学生が授業内容により具体的なイメージが持てるようになり、学生の授業内容の理解度が上昇しました。そして毎回コメントの提出を求めたことで、学生の授業に対する理解度が確認でき、次回の授業の冒頭で補足説明を行うことで、学生の理解度がより高まったとの実感があります。

演習科目では、参加者全員に発言を義務付けたことで、回を追うごとに質問が工夫され、また質問に答えるため報告者のリサーチの精度も上がっていったとの手応えがあります。

5. 今後の目標（これからどうするか）

少数ではあるが、一部、授業内容が消化しきれない学生や明らかに基礎知識が不足している学生がいたので、フォローアップする機会を設けたいと考えています。

6. エビデンスとなるもの

- ・講義科目（「西洋史研究入門（1）（2）」「ヨーロッパ精神史」「外国女性史」「観光文化（ヨーロッパ）」の授業資料
- ・上記科目の毎回の課題（Teams から提出したコメントシート）
- ・演習科目（「西洋史演習（1）」「史資料演習」「文献購読演習」「コミュニケーション能力基礎演習」「基礎ゼミナール」）で配布した史資料。
- ・演習科目での学生の報告レジュメと学期末レポート

ティーチング・ポートフォリオ

大西 克典

(記入日： 2023年 2月 25日)

1 教育の責任 (何をやっているか：担当科目)

西洋史概説(2)、文献講読演習、西洋史演習(2)、史資料演習、観光歴史学、フランス語で読む文化と社会

2 理念 (なぜやっているか：教育目標)

- ・西洋史に関する基礎的な知識を身につけさせるため
- ・学生自らが情報を主体的に獲得し、歴史的な知識に裏打ちされた考察を行うことができるようにするため

3 方法 (どのようにやっているか：実践の工夫)

- ・学生の理解度や知識の定着度を測るために、Forms を用いた小テストなどを行った。(西洋史概説(2)、観光歴史学など)
- ・Teams 上に資料を上げ、講義資料をいつでも簡単に閲覧することができるようにした。(西洋史概説(2)、西洋史演習(2)など)

4 成果 (どうだったか：結果と評価)

- ・Teams 上に資料を上げることで、時間や場所の制約を受けずに、学生がデータにアクセスでき、主体的な学習を促すことにある程度つながった。
- ・しかし、授業に関する全ての情報(レジュメ・授業そのもの)をいつでも見直すことができるという安心感から、限られた時間の中で授業内容を理解しようとする姿勢が薄れてしまうという弊害もある。
- ・特に成績があまり振るわない学生においては、授業内容を咀嚼させ、学習・研究を促すための工夫が必要と思われる。

5 今後の目標 (これからどうするか)

- ・Teams や Forms などを用いた授業資料の配布やアンケート・課題の設定を続ける一方、それらを用いた事前・事後学習へと導く工夫を行う必要がある。

・特に成績の振るわない学生や明らかに基礎知識が不足している学生については、フォローアップする機会を設けたい。

6 エビデンスとなるもの（資料の種類などの名称）

1. 西洋史概説(2)講義資料
2. 歴史学(2)講義資料
3. 西洋史演習(2)資料
4. 観光歴史学講義資料
5. リアクションペーパー及び小テスト(西洋史概説(2)、観光歴史学など)

ティーチング・ポートフォリオ

史学科 柴田 万里子

(記入日：2023年 2月 28日)

1 教育の責任 (何をやっているか：担当科目)

- ・「教育課程論」(教職に関する科目 2 - 4 年後期)
- ・「教育実習演習(事前・事後指導)」(教職に関する科目 3 - 4 年通年)

2 理念 (なぜやっているか：教育目標)

- ・将来、創造的で省察的な教師に育つことを願い、教育に対する多面的多角的な見方・考え方や、その基礎となる理論や概念を丁寧に共有する。
- ・他者と協働しながら課題を解決することを通して、現在求められている「協働的な学び」のあり方への省察を経験的に深める。

3 方法 (どのようにやっているか：実践の工夫)

- ・「教育課程論」では、現行学習指導要領で求められる事柄を中心に、その背景やそれらをめぐる議論を、グループワークを通して丁寧に検討し議論する時間をたっぷり設けた。また、最後に必ず個々の振り返りの時間を設け、各回の課題に対してだけでなく「自分にとって大事だった学び」についても言及できる機会とした。ワークシートと各自の振り返りは、Teams で共有できるように毎回アップロードした。
- ・「教育実習演習」(事前・事後指導)では、学科の異なる学生同士が教育実習や将来教師になるという共通の目標に向かって協働していけるよう、学科を超えたグループワークを組織した。また、教育実習生や教師に求められる事柄に対し、教育現場や社会の文脈と関連付けて意味付けることを意識した。

4 成果 (どうだったか：結果と評価)

- ・「教育課程論」では、グループワークでは四苦八苦しながらも、振り返りで筆の唸るような感想や論題を書く学生が多かった。期末にはオープン・エンドな設問で論述形式の試験を行ったが、学生は想定以上の力作を準備した。授業評価ア

ンケートでは満足度も概ね高く、自由記述において「深い学びを経験できた」と書く学生が複数いた。(エビデンス 1、2)

・「教育実習演習(事前・事後指導)」では、学科の異なる学生同士が自然に協働して課題に取り組むようになり、より深く課題に向き合うようになった。また、先輩から教育実習の経験を聞く回では学生からたくさんの質問が飛び交い、グループでの意見交流の成果が窺えた。(エビデンス 1)

5 今後の目標(これからどうするか)

・学生の理解度や学年・学科による教職教養の知識と経験の差異に配慮しつつ、その差異を生かした課題設定を探究し、授業改善に努める。

・教職課程の全体を見渡せる知識と経験を増やし、それぞれの学生の学修環境の文脈に寄り添って授業づくりを行うよう努める。

6 エビデンスとなるもの(資料の種類などの名称)

・グループワークシート、振り返りシート、レポート等の学生から提出された成果物

・2022年度授業評価アンケート(後期)(非公開)

ティーチング・ポートフォリオ

学科：史学科 氏名：志村 瑠璃

(記入日：2023年2月10日)

1 教育の責任（何をやっているか：担当科目）

【図書館に関する専門教育科目】

図書館概論，図書館制度・経営論，図書館情報技術論，図書館サービス概論，情報サービス論，情報サービス演習(1)，情報サービス演習(2)，図書館情報資源概論，情報資源組織論，情報資源組織演習(1)，図書館情報資源特論，図書・図書館史

【共通教育科目】

情報リテラシー，キャリア・プランニング III(2)，キャリア・プランニング IV(1)，キャリア・プランニング IV(2)

2 理念（なぜやっているか：教育目標）

図書館について学ぶことを通して、社会における共時的・通時的な知識の循環について検討できるようになることを目指している。知識の幅広さについて知るとともに、情報の利用に関わる実際的な技術を身につけることを目標としている。

3 方法（どのようにやっているか：実践の工夫）

全科目において、授業終了時には毎回リアクションペーパーとして感想や質問の提出を求め、学修内容を見直す時間を設けた。そして、次回の冒頭に感想の紹介や質問への回答をおこなった。

講義科目では、学生が授業内容に注意を向け続けられるよう、穴埋め形式の配布資料を用いた。全15回の折り返し時点である第8回目頃には小テストを実施し、学生が学修内容を振り返る機会を設けた。また、「図書館情報資源概論」では、実際に大学図書館で各種資料と蔵書構成を確認する課題をおこない、講義で学んだ内容と実物を結びつける機会を設けた。

演習科目では、まずは図書館における実践を最終的な到達目標として示し、その後に段階的な課題を設定した。他にも、以前に取り組んだ課題と似た課題

を織り交ぜることで、以前の間違いを見直した成果を活かせるようにした。

4 成果（どうだったか：結果と評価）

いずれの科目においても、授業評価アンケートにおける教材の利用に関する質問にて、全回答者から「効果的」あるいは「どちらかというと効果的」との回答があった。講義科目の穴埋め形式の配布資料も、学生から一定の評価を得ていると考えられる。演習科目では、講義科目で学んだことを演習科目で応用できず、演習課題の理解に時間がかかる学生が見られる

5 今後の目標（これからどうするか）

演習科目の初回に講義科目の復習を扱うだけではなく、講義科目の中で演習科目との関わりに言及しておくなど、講義科目と演習科目の接続を意識した授業構成にしたい。

6 エビデンスとなるもの（資料の種類などの名称）

- ・リアクションペーパー
- ・学生から提出された演習課題等の成果物
- ・2022年度前期授業評価アンケート
- ・2022年度後期授業評価アンケート